接収された関内地区。左上は横浜公園、その右隣の港町一帯は兵舎地区（昭和22（1947）年）（2）

第二次世界大戦と公園緑地

大正12（1923）年の関東大震災と前後して、都市の拡大に広域的に対処する「地方計画」の考え方が広まり、昭和14（1939）年に「東京緑地計画」が定められます。この計画は日本で最初の広域都市計画といえるもので、東京を中心に神奈川など周辺地域を含めた環状緑地（グリーンベルト）の配置を計画するなど、先進的な内容でした。一方、この時代は昭和6（1931）年の満州事変にはじまり、日本が戦争への道を歩んでいく時代でもあります。昭和12（1937）年に防空法が公布され、空襲への備えが進む中で、公園や緑地に注目が集まります。昭和16（1941）年には防空法が改正され「防空緑地」が定められます。防空緑地とは、空襲被害が出た場合の避難場所、また延焼を防ぐ空地、各種防空基地として使用するための公園緑地で、その配置の多くは東京緑地計画の緑地を踏襲したものでした。

防空緑地は戦後も緑地として残り、公園となっているところも多く、県立保土ケ谷公園、県立三ツ池公園がその代表例です。このほかに、護国神社外苑を兼ねて整備された三ツ沢公園や本牧公園など市が整備した15公園があります。

昭和20（1945）年に戦争が終結すると、横浜には連合国軍が進駐し、焼け残った市街地も接収されます。公園も例外ではなく横浜公園や山下公園などが接収され、将校の住宅に利用されるなど苦しい時代が続きました。

その後、粘り強い交渉によって接収解除が進み、新たに公園として整備される所も出てきましたが、現在も市内には接収されている場所や返還されたばかりの土地も多く、その利用が注目されています（コラム参照）。このように今日の横浜の公園は、第二次世界大戦に大きな影響を受けているといえます。

Column 03

米軍施設と跡地のこれから

米軍施設は、市のまちづくりに大きな制約を与えていることから、その返還は市民共通の念願であり、市政の重要課題です。

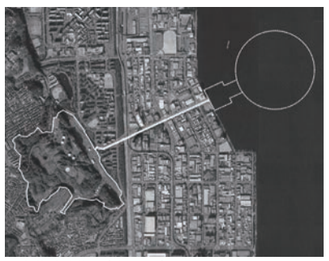
平成16（2004）年の日米合同委員会において、市内米軍施設約528ha（当時）のうち、7割を超える面積の返還方針が合意されました。その翌年に返還された旧小柴貯油施設（金沢区約53ha）は、旧日本海軍の貯油施設を米軍が接収したもので、今も敷地には巨大な燃料タンクが残されています。平成29（2017）年現在、広域公園として都市計画の手続きなどが進められています。

この他にも、返還施設の中には公園緑地としての整備が検討されている箇所があります。旧深谷通信所（泉区約77ha）は旧日本海軍の送信用の通信施設を米軍が接収したもので、送信施設周辺の円形の空地は通信の電波干渉を避けるために設けられたものです。また、旧上瀬谷通信施設（瀬谷区・旭区約242ha）は、米軍の受信用の通信施設でした。広大な敷地が電波障害防止地域に設定され、その地域内の農地では、灌漑（かんがい）・排水設備やビニールハウスなどの設置は認められず、制約の多い農業を強いられてきました。

都市化が進んだ横浜市において、今後これほどの大規模なオープンスペースが新たに生まれるとは考えにくく、魅力ある跡地利用が求められています。

旧上瀬谷通信施設（約242ha）

旧深谷通信所（約77ha）


旧小柴給油施設（約53ha）

防空緑地と公園

昭和16（1941）年、防空体制が強化され、陸軍は野毛山公園などを接収、高射砲陣地を構築しました。市も防空緑地として本牧、弘明寺（ぐみょうじ）、常盤、神ノ木、綱島など15の「防空公園」を整備しました。この中には子安台、岡村、岸根のように高射砲陣地が築かれ、戦後は進駐軍が接収、さらにその後は陸上自衛隊が使用していた公園もあります。岸根公園は昭和15（1940）年の「紀元2600年記念事業」の一環として市民の健康福祉増進と防空を目的に本格的な総合競技場を備えた公園として計画されました。しかし整備は中断、陸軍の高射砲陣地として接収され、戦後は米軍基地を経て返還され昭和46（1971）年にようやく運動公園として開園しました。

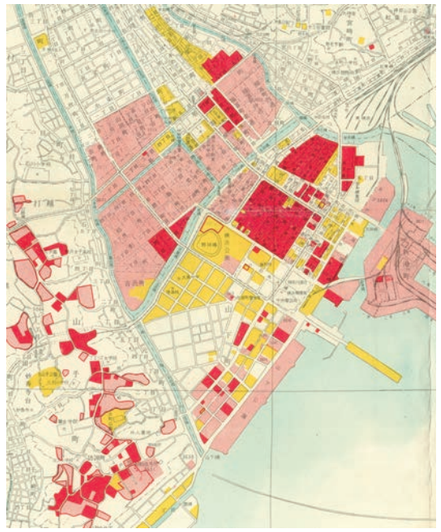
造営中の野毛山高射砲陣地。横浜の市街地が一望できる場所に築かれた（昭和12（1937）年～昭和20（1945）年）（2）

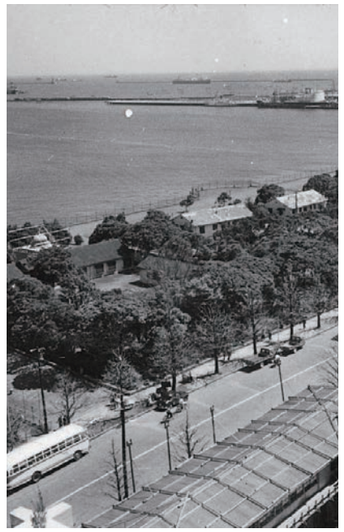
進駐軍による接収と公園

横浜税関にアメリカ第8軍司令部が置かれたこともあり、関内・関外を中心に多くの施設が接収されました。

公園も例外ではなく、山下公園には将校用の住宅が立ち並びました。中央部は昭和29（1954）年に返還されましたが、全面返還は昭和35（1960）年まで待たねばなりませんでした。

横浜公園では、野球場は「ルー・ゲーリック・スタジアム」と改名され、教会（チャペルセンター）や体育館（フライヤーズ・ジム）も建設されました。昭和27（1952）年一部を除き返還されますが、最後に残ったチャペルセンター（現在の日本庭園部分）が返還されたのは横浜スタジアムが竣工する直前の昭和53（1978）年でした。


関内周辺の接収箇所（着色部分）
「横浜港隣接地帯接収現況図」（昭和29（1954）年）部分（1）


山下公園の将校用の住宅。写真は返還前に取り壊される前のもの（昭和34（1959）年）（2）

復興と返還地の公園整備

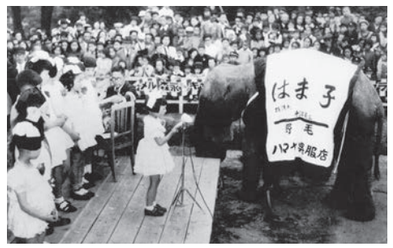
日本貿易博覧会が横浜市と神奈川県の主催で昭和24（1949）年に開催されました。第一会場は返還された野毛山公園で、この時整備された野毛山遊園地（昭和26（1951）年開園）が野毛山動物園の原形となりました。第二会場跡地は一時横浜市役所として使われたのち反町公園として整備されました。昭和38（1963）年開園当初の反町公園はジェットコースターやゴーカートを備えた遊園地的な公園でした。また、博覧会時の芸能館の建物は、その後神奈川スケートリンクとなりました。

この他、市内の大規模公園には軍の用地や進駐軍接収返還地に由来をもつものが多くみられます。港の見える丘公園や、富岡総合公園、野島公園などもその例です。

日本貿易博覧会会場（昭和24（1949）年）（2）

反町公園の噴水とジェットコースター（年不詳）

日本貿易博覧会野毛山会場の賑わい（昭和24（1949）年）（2）



インドゾウ「はま子」の野毛山遊園地入園（昭和26（1951）年）
（横浜市立野毛山動物園提供）

画像所蔵 （1）横浜市中央図書館 （2）横浜市市史資料室